

21. 2型糖尿病患者における血中 ANGPTL2 濃度と炎症及び動脈硬化検査値との関連について

埼玉医療センター

¹⁾ 糖尿病内分泌・血液内科, ²⁾ 救急医療科
氏家 淳¹⁾, 鈴木達彦²⁾, 竹林晃三¹⁾, 山内元貴¹⁾,
篠崎浩之¹⁾, 成瀬里香¹⁾, 原 健二¹⁾,
末次麻里子¹⁾, 土屋天文¹⁾, 犬飼敏彦¹⁾

【目的】ANGPTL2 は組織にて慢性的な炎症を引き起こすことが知られおり、動脈硬化性疾患、糖尿病等、様々な疾患との関連性が示唆されている。今回、我々は2型糖尿病患者における血中 ANGPTL2 濃度と炎症マーカー及び動脈硬化検査値との関連性について検討した。

【対象と方法】血糖コントロールが不十分で入院治療を必要とした2型糖尿病患者 (n=70) を対象に空腹時血中 ANGPTL2 濃度を測定し、その各種検査値との関連性を調べた。

【結果】ANGPTL2 は健常者 (n=9) に比し、2型糖尿病患者で有意に上昇していた (3.5 ± 1.1 vs. 2.5 ± 0.4 ng/mL, $P < 0.0001$)。ANGPTL2 は FPG, HbA1c 及び BMI とは有意な相関を示さなかった (それぞれ $P = 0.2335$, $P = 0.1806$, $P = 0.6056$) が HOMA-IR とは正の相関を示した ($P = 0.0419$)。ANGPTL2 は動脈硬化関連検査値である IMT, CAVI-index, LOX-1index とは相関を示さなかった。一方で ANGPTL2 は変性 LDL を反映すると考えられている LOX-1 containing ligand ApoB (LAB) と有意な正の相関を示した ($P = 0.0147$)。更に ANGPTL2 は炎症マーカーである hsCRP, フィブリノーゲン (Fib) と有意な正の相関を示した (それぞれ $P = 0.0457$, $P = 0.0001$)。また ANGPTL2 は eGFR とは有意な負の相関を示したが ($P = 0.0063$)、網膜症の程度とは関連しなかった。

【結論】健常者に比し2型糖尿病患者において血中 ANGPTL2 濃度は有意に上昇していた。ANGPTL2 は血糖コントロールの指標 (HbA1c, FPG) や肥満の程度 (BMI) とは相関せず動脈硬化の指標とも関連しなかったが炎症マーカーや変性 LDL の指標及び腎機能と関連する可能性が示された。

22. 当院で培養検査により診断したスポロトリコシスの集計と PCR を用いた新規診断法の報告

皮膚科学

藤平尚弘, 林 周次郎, 嶋岡弥生, 石川里子,
鈴木利宏, 井川 健

【目的】スポロトリコシス症の PCR 診断は確立していない。しかし、スポロトリコシス症は皮膚組織からの真菌培養で確定診断される疾患であるが、培養技術や採取した菌体量により陰性となることがある。今回、過去に本教室で培養検査によりスポロトリコシス症と診断した症例を集計するとともに、PCR を用いた新規診断について検討した。

【結果】1975年以降、当科で真菌培養検査の菌種の同定により診断したスポロトリコシス 125 症例 (男 63 例女 62 例) あった。年齢は 0 歳から 85 歳 (平均 49.6 歳)。発症地域は栃木県の宇都宮市と壬生町が多く、発症部位は頭頸部 (52%) と上肢・手で (44%) で大多数を占めた。臨床型は固定型が 64.2% と多く、リンパ管型が 15.7%，また頭頸部に多発し固定型、リンパ管型の区別ができる例が 19.0% であった。播種型や皮膚外病変を認めた例は無かった。経過が確認できた症例のうち 111 症例で治療にヨウ化カリウム (KI) が用いられ、KI の総投与量は 10 歳未満では平均 43.3 g で、治癒までにかかった期間は平均 12.8 週、10 歳以上では KI の総投与量は平均 116.2 g で、平均 17.4 週で治癒している。Sporothrix schenckii の特異的配列を標的にしたプライマーを用いての PCR 検査を行ったところ、培養検査で陽性となつた症例 20 例は全て PCR 検査においても陽性であった。一方で、臨床的にスポロトリコシスを疑つたが培養検査が陰性であった症例についても数例で PCR が陽性となった。

【結論、考察】ここ 10 年間で本症と診断した症例は約 10 例に対して、1975 年から 1985 年の間では約 70 例認め、近年は本症の発症が低下傾向であった。PCR による本症の診断については、実用的である可能性があり現在、症例を増やして検討中である。